

# 明治中期の海外博覧会と日本

～ 焼き物（陶磁器及び七宝焼）産業を中心に ～

松田 千晴

## 一 はじめに

明治政府は、公示事項を周知させる目的で明治一六年（一八八三）七月二日に「官報」を創刊した。官報は、各省庁の告知事項をまとめた、一種の逐次刊行物である。

官報の主な内容は勅語・太政官布告・勅令、各省の令・布達・達・告示・伺指令・叙任から警視庁・東京府の令・告示等にいたるものであったが、これらの他にも「彙報」（いほう）「在外公館報告」「外報」「広告」等の欄があった。

官報は、もともと明治政府の考えを広く国民に浸透させるといふ目的の刊行物であり、その意味では一方通行ともいえるような編集となっているが、新聞の雑報欄的な彙報・在外公館報告・外報・広告等については当時の社会情勢（国の内外を問わず）を知る上で貴重な史料となりうるものである。

官報が創刊されたのは、富国強兵の名のもと、明治政府が殖産興業政策を強力に推進していた時代であった。折しも、この時代は殖産興業の起爆剤ともいわれる博覧会が世界各国で開催されていた。雑報欄的とはいふものの、このような時代背景は官報の記事の中に色濃く表れている。

ところで、近年は明治に対する関心が高まってきたことを受け、明治を対象とした研究が各方面から行われるとともに、明治を対象とした博覧会が盛んに開催されるようになってきた。また、博覧会そのものに対する研究も多

く見られるようになり、一九世紀中頃から二〇世紀にかけて開催されてきた博覧会の歴史的意義も明らかになってきた。

しかし、博覧会に関わる研究は、研究そのものの歴史が浅いこと・研究者の絶対数が限られていること・研究の多くが博物館や美術館の展覧会（日本から輸出された美術品の紹介が主題）と関わって進められていることから、当時の日本人による記録や国内に残された史料（資料）に基づいた、日本から見た博覧会というものにならざるを得ないのが現状である。

そこで本稿においては、明治中期の海外における博覧会の開催状況はどのようなものであったのか、主催者はどのような意図で博覧会を開催したのか、それに対して日本はどのような対応を見せたのか（焼き物を中心に）といった点を、オランダ・アムステルダムで開催された植民地物産一般輸出品博覧会に関する官報の在外公館報告や外報等から明らかにしていきたいと考える。

なお、記事を引用するにあたっては旧字体を変更するとともに、難解な地名等については読み方を「和蘭（\*オランダ）」というように付け加えた。ただし、最初から原文に読み方が付記されていた場合は、和蘭（オランダ）というように「\*」を付けないこととした。また、補説を必要とする場合には、「英国ハ博覧会創設ノ鼻祖ナリ（※嘉永四年に第一回ロンドン万国博覧会を開催）」というような形で挿入した。

## 二 海外博覧会の状況

明治一六年（一八八三）、オランダ・アムステルダムにおいて植民地物産一般輸出品博覧会（以下本博覧会）なるものが開催された。

本博覧会に対して明治政府は経費二万円をもって参加しているが、当時の日本がどのように対応していたのかということ、彙報や在外公館報告・外報から探っていきたいと考える。

## (一) 本博覧会開設の目的

オランダは、次の記録「和蘭国博覧会」からも分かるように、植民地であるオランダ領インドシナの物産を欧州各国に紹介し貿易がより活発になることを目的として本博覧会を計画したのであった。

その趣旨に賛同した欧州各国も、それぞれの植民地の物産を出品・展示している。

また、ペルシヤや清国・日本も輸出の発展を願って参加している。

## 一 和蘭国博覧会

和蘭国（\*オランダ）博覧会ハ元私立ニ係ルト雖和蘭国政府ハ当初ヨリ一之ヲ翼賛シ府下ノ新開地ニ於テ莫大ノ地面ヲ無代価ニテ貸与シ且各国政府ニ招状ヲ送り此ノ挙ノ目的ハ特ニ商事ヲ拡張シ工業ヲ奨励シ人民ノ氣風ヲ誘掖シ各国ノ懇親ヲ鞏固ニスルノ具トナスニ在ル事ヲ言明シ以テ出品セン事ヲ請ヒタリ蓋各国政府ノ競ヒテ此ノ会ニ出品ヲ為シタルハ蓋トシテ和蘭国政府ノ斡旋ニ由ル事疑ナキナリ

博覧会場ハ大別シテ植民地物産区、輸出品物区、美術区、動植物区、トス植民地物産区ノ如キハ殊ニ広大ヲ極メタルモノニシテ該博覧会中最人目ヲ驚スノ区タルヘシ何トナレハ各国植民地ノ物産ヲ陳列スルハ此ノ会ヲ以テ嚆矢トスレハナリ

植民地物産区ハ又別チテ三部ト為ス其ノ第一部ハ其ノ風土ニ関スル者即地理、天象、地質、鉱物、植物、動物、人体、ノ諸類第二部ハ土民ニ関スル者即人口ノ統計、生活交際ノ状態、ノ諸類第三部ハ植民地ニ住スル歐人ノ利益ト為ル者及右歐人ト土民トノ交際ニ関スル者ナリ

## (中略)

欧州諸国ヨリ此ノ博覧会ニ出品セサルモノナク其ノ他波斯（\*ペルシア）、支那、日本モ亦之ニ出品セリ」（註一）

## (二) 本博覧会開会日における会場内の状況

本博覧会の開場式は、オランダの皇帝・皇后両陛下（以下両陛下）をはじめ、各国の来賓をお迎えして盛大に行われたことが、次の記録「博覧会景況概略（在和蘭博覧会事務官報告）」から分かる。

ところで、前述のように本博覧会には日本も参加しているが、明治政府が参加を決定したのは僅か一年前のことであり、他の国々に比べると準備期間が極めて短かったようである。ところが、日本の展示は、開会式当日には他の国々に先駆けてほぼ完了していたのである。しかも、日本からの展示品の多くは、オランダの両陛下の目を奪うほどの「精良ニシテ美ナリ」といえるような高い水準のものであった。

当時の交通事情と準備期間から考えると、これは日本の快挙といえるものであり、欧州政界に好印象を与えたものといえる。

## 一 博覧会景況概略（在和蘭博覧会事務官報告）

本年五月一日午後第一時和蘭国（\*オランダ）皇帝皇后開場式ニ臨御各國公使等随行ス各國ノ陳列場通御ノ節我方陳列場ニ入御セラル下官奉導シテ列品ノ性質等下問ニ応シテ答弁シ且本日臨御ノ榮ヲ辱クシタルモ日本国ハ遠隔ノ地ナルヲ以テ品物未多ク来着セス遺憾ノ旨ヲ言上セシニ遠国ニシテ斯ノ如ク各国ニ先チ陳列セシハ満足ノ至殊ニ各品珍シク且精工ナル品多シトノ勅賞ヲ蒙リタリ皇后ヨリハ陳列ノ内日本ノ織物ヲ見ス出品之ナキヤト下問アリシユエ早速名産会社工商会社出品ノ内ヨリ差出サセタルニ殊ノ外賞美セラレ出品人へ親シク其ノ性質ヲ下問アリタリ

同夜安特堤府（\*アムステルダム）知事ヨリ皇帝皇后臨幸ノ旨ヲ以テ招待アリ下官各外交官ト共ニ参会シタルニ皇帝ノ侍補官来リ告ケテ云ク只今皇帝ヨリ日本日博覧会開場式ニ臨ミタルニ日本国列品場ニ到リテ殊ニ愉快ヲ覚エタル旨貴下へ伝フヘシトノ御沙汰アリシト

右ノ外宴会アル毎ニ我カ列品ヲ賞賛スル演説アリ就中五月二日ノ夜各国

公使及事務官等二百余名ノ大宴会ニ於テ副会長ベルス氏ノ演説中各国出品ノ事ヲ謝シテ後ニ云フ支那国ハ二ヶ年前ニ出品ヲ承諾シテ現今来着ノ品ニモ宏大ナル品々ヲ見受ケタリ云々日本国ハ僅ニ一ヶ年前ニ出品ヲ承諾シテ殊ニ最遠隔ノ地タルニ拘ハラズ多ク精良ノ美品ヲ出サレタルノミナラス各国ニ先チ出品ノ陳列ヲ整頓セラレシハ殊ニ感謝スル所ナリ云々ト此ノ演説ヲ畢ルヤ宰相ヘムスケルク氏并外務卿ヒルボアー氏会長コルドス氏等席ヲ起チテ下官ノ席ニ来リ日本国ノ榮譽ヲ祝スル旨ヲ述ヘタリ」

(註2)

### (三) 博覧会場となつたアムステルダム

アムステルダムは、物価が高い都市として広く知られていたようである。

そのような都市で博覧会が行われれば、物価の高騰を招くことは容易に想像できるが、さらに外国人に対しては二重価格となり、滞在者の出費がかさんでいたことが「和蘭国博覧会開場式ノ景況」から分かる。

#### 一 和蘭国博覧会開場式ノ景況

五月一日発在安特府(アムステルダム)特別通信委員ノ報知ニ日ク往昔我カ独国 フランクフルト ライプチヒ等二行ハレタル祭市一変シテ今日ノ博覧会トナレリ英国ハ博覧会創設ノ鼻祖ナリ(※嘉永四年に第一回ロンドン万国博覧会を開催)トノ声誉ヲ博スト雖之ヲ完全整理シタル功ハ仏帝拿破倫(\*ナポレオン)第三世ニ帰セサルヘカラス仏国当時ノ情態ヲ追想スルニ帝ハ只管意ヲ政治経済ノ両点ニ注キ国民ノ資産ヲ豊裕ニシ以テ其ノ不満ヲ消遣セントセリ蓋拿破倫第三世ハ巴里(\*パリ)ヲシテ恰モ路易(\*ルイ)第十四世ノ巴里ノ如ク独リ仏国ノ京城タルノミナラス兼子テ全世界ノ首府タルノ繁華ヲ占メ世界ニ富豪ヲ輝サシメンニハ宇内ノ人民ヲ巴里府ニ雲集セシメ泰平ノ競争ヲ起スヘキ好機会ヲ与ヘサルヘカラスト為ス是千八百六十七年ニ於テ空前絶後ノ万国大博覧会(※

慶応三年の第二回パリ万国博覧会)ヲ仏京巴里ニ開設シタル所以ナリ後世若十年許ツ、ヲ間シテ大博覧会ヲ開設シタランニハ最初拿破倫ノ考慮ノ如ク各国ノ人民ハ互ニ新規巧妙ナル發明進歩ヲ示ス事ヲ得シナルヘシ然ルニ其ノ後維也納ニ費拉府ニ悉特尼(シドニー)ニ麦普尼(メルボルン)ニ年々万国博覧会ノ設アリ其ノ数ナルカ故ニ其ノ功ハ漸次ニ減少セリ斯ノ如ク続々踵ヲ接シテ起ル所ノ博覧会ニ於テ多ク新奇ノ物品ヲ得ント欲スル豈得ヘケンヤ是近來漸次独国及英国ニ於テ万国大博覧会ヲ厭忌スルノ傾向アル所以ナリ但シカク断言スト雖万国博覧会流行ノ時代ハ往昔ノ祭市流行ノ時代ト一般ニ全ク経過シ去レリト言フノ旨意ニアラス近年博覧会ヲ開設スルニ当リ世間ニ広告スルニ從來慣行ノ主意ニ加フルニ必一ノ特別ナル目的ヲ以テス又實際ニ於テ殆特別博覧会トモ称スヘキモノ最多シ澳州(\*オーストラリア)悉特尼及麦普尼ニ開キタル博覧会ハ此ノ新大陸ノ物産工業モ亦舊大陸諸国ノ物産ニ列スル事ヲ得ルニ至リタル旨ヲ表示シタリ本年安特府ノ博覧会ノ如キモ其ノ主眼トスル所ハ蘭領印度ノ為ニ開設シタルモノナレトモ傍ラ他国ノ物産工業ヲ公示スルモ敢テ其ノ本旨ヲ妨クル事ナシ今日此ノ博覧会ハ尚不完全ナル点ナキ事能ハスト雖蘭領印度地方ノ実況ヲ目撃セシムル事未スノ如ク完全ナルモノアルヲ知ラス博覧会場ハ当府ノ南端ニアルヲ以テ一方ニ僻在スト雖尚郭外ノ市中ニアルカ故ニ往返交通ノ便ヲ欠ク事ナク加フルニ当時博物館建築ノ為ニ自ラ絶大広濶ノ通路ヲ得ル等ノ便アリ余ハ一昨日初メテ館内ヲ縦覧シタルニ準備未整ハス尚スクアレカシト思ヒシモノ寡カラサリシニ本日開場式ニ臨ミテ之ヲ見レハ全ク豹変シ僅々ニ晝夜ニシテカク面目ヲ改メタルカト疑ヒシ程ナリ唯此ノ満足シタル感覺ヲ害セザラント欲スレハ本日ハ深く側路ニ入りテ細見セサルヲ宜シトス他国博覧会ニ於ケルモ亦然リ蓋出品者ヲシテ開会ノ期限迄ニ容易ニ陳列ヲ了セシムルノ良法ヲ發明シタル者ハ古來未之アラス今回措置ノ早ク整ヒタルハ蘭領印度部及

図画室ニシテ独国工芸部ハ既ニ陳列ヲ終リ伊太利（\*イタリア）工芸部ハ尚全ク空虚ナリ曾テ安特堤府ニ来遊シテ略其ノ景況ヲ記憶スル者ハ必其ノ今日ニ一変シタル景況ニ驚クヘシ是皇帝皇后ノ駐輦ト博覧会開設トノ致セル影響ナリ皇帝ニハローノ王城ニ常住セラレ安特堤府ハ軍ニ首府タルニ過キス二週日以上此ニ駐輦アルハ実ニ稀ナリトス故ニ此ノ駐輦ハ府民ノタメ珍異ト云フヘシ伯林ノ王城ニモ劣ラサル安特堤府宮殿近傍ノ大路ニハ警備ヲ張り王室ノ車馬ハ絡駈織ルカ如ク数千ノ士女窓戸ヲ開キテ之ヲ瞻望ス平常不廉ヲ以テ有名ナル安特堤府ノ物価ハ頓ニ騰貴シ他国人ニ対シテ特ニ甚シキモ亦博覧会ノ一影響ナラン余ハ当府ニ到着シタルノ日ベデケル氏編輯ノ旅案内ニ載セタル諸旅館ヲ悉ク訪ヒタルトモ旅客充滿シテ上ル事ヲ得ス後ニ纒ニ淡暗ナル一小寢室ヲ一日四「グルデン」ニテ借受クル事ヲ得タリ惟フニ当府ニ駐在スル事ヲ必要トセサル輩ハユトレヒト ツァーンダム ハールレーム 等ノ地ニ止宿シ日々車馬ニテ当府ニ来往スレハ反テ便益ナルヘシ然レトモ此ノ如キ熱鬧ハ蓋開場式後一二日ヲ経ハ大ニ減スヘシト信ス当日ハ幸ニシテ天気晴朗ナリシ博物館ト美麗ニ裝飾シタル蘭領印度部ノ前面トノ中央ニ高壇ヲ設ケ錦欄ノ天幕ヲ張レリ式場ニハ正服ヲ着シタル兵士ヲ配布シ士官モ亦正服ニ橙黄色ノ飾緒ヲ纏ヒ衆庶ノ道ヲ尋ヌルモノアル事ハ懇切ニ之ヲ教示シタルカタメ行路頗ル静肅ナリシ開場式ハ午後一時ト定メタルトモ招待ヲ受ケタル賓客ハ既ニ二時前ヨリ会場ニ參集シタリ貴女ノ著シタル新様ノ彩衣武官外交官ノ衣服ハ燦然トシテ壯觀ヲ極メタリ斯ノ如キ大集會ニ於テ常ニ服制ノ異様ナルヲ以テ注目セラル、モノハ支那人ナリ其他ノ「フロックコート」ヲ着シテ筒帽ヲ載キタル日本人赤色ノ上衣ヲ穿チタル英国人匈牙利（\*ハンガリー）護国兵ノ士官等モ亦甚珍シカリシ一人アリ毛皮ヲ以テ裝飾シタル赤色ノ広套ヲ著シ黄金ノ大鎖ヲ頸ニ掛ケタルハ見ル者何国カノ將軍ニアラスハ必宰相ナラント想像シタリシニ終ニ倫敦（\*ロンドン）ノ一府議員タル事ヲ聞キ得タリ皇帝ニハ皇后同伴ニテ定時著御アリ設ノ玉座ニ著カセラル皇帝ニハ軍服ヲ召サセラレ橙黄色ノ大飾緒ヲ纏ハセ給ヒ皇后ニハ蘇苔綠色ニシテ長裳アル衣服ニ同色ノ帽ヲ召サセラレタリ男女ノ奏樂アリシ後皇帝ノ万歳ヲ祝シ奏リタリ抑々今回ノ陳列所ハ他ノ博覧会ノ如ク一大屋厦ニアラスシテ所々ニ数棟ヲ建設シタルモノナリ皇帝皇后ニハ蘭領印度部ヲ始メ椰子室ヨリ各国ノ区部ヲ巡覽アリ最終ニ暫時工芸部ニ玉趾ヲ止メサセ給ヒ皇帝ニハ各国出品人ヲ召シ懇切ナル勅語ヲ賜ヒ皇后ニモ終始喜悅ノ躰ニテ還御アリシハ午後四時ナリシト（五月四日独逸キユルン新聞）（註3）

#### （四） 日本会場における販売状況

当時の博覧会というのは、ただ単に展示品を観覧する場であるのみならず、即売も行う場であったため、入場者数はオランダ政府及び主催者はもちろんのこと、参加各国にとつても大きな関心事であった。

オランダ政府は、広く国民を啓蒙するためなのか、あるいは入場者収入を確保するためなのかは定かでないが、会期の途中から入場料を半額にしたことにより、入場者数の増加に成功したようである。

とところが、多くの国の展示場においては販売額が伸びていなかった。それに反して、日本が売上を順調に伸ばしていたことは「蘭都博覧会景況（七月十二日付在和蘭国我カ博覧会事務官長報告）」から分かる。しかも、その内訳を見ると、名産会社や円中文介（註4）・起立工商会社（註5）・丹山陸郎（註6）・精磁社（註7）及び七宝会社（註8）など、焼き物（陶磁器や七宝焼）を扱う商社が売上を大きく伸ばしていた。

「蘭都博覧会景況（七月十二日付在和蘭国我カ博覧会事務官長報告）」  
 当府（\*アムステルダム）博覧会各国出品ノ陳列ハ漸ク六月末ニ至リテ整頓シ本月一日ヨリハ入場料モ平日ハ半減（五拾セン）トナリシヲ以テ

縦覧人ハ日々増加ノ景況ナリシカ各区トモ売品甚少シ然ルニ我カ区ハ他各区ニ比スレハ売品特ニ多クシテ昨十一日迄ノ売約済及現金払ノ金額ハ蘭貨三千五百「フロラン」各産会社同貳千貳百四拾五「フロラン」七宝会社同八千六百三拾「フロラン」円中文介同千〇五拾五「フロラン」同人売店同三百「フロラン」丹山陸郎等ニシテ此ノ外工商会社精磁会社等未確報アラスト雖精磁会社ハ凡五百七拾「フロラン」位ノ売却額アリシナラン曩ニ当国ノ皇帝開場式ニ臨御ノ際觀覽アリシ各産会社ノ出品陶器花瓶壹対(代価千九百「フロラン」)ヲ買上ケラル、旨本日侍従ヨリ通知アリ又白耳義(\*ベルギー)国皇族某其ノ妃ト共ニ昨十一日来場アリ退場ノ際其ノ侍従カ五六品ノ買付票ヲ持帰リタルヲ見レハ又若干品ヲ買上ケラル、ナル可シ(註9)

ただし、日本の売上が伸びている反面、「安特堤博覧会景況(農商務省報告)」からも分かるように、日本の作品の価格が高すぎるという批判も出ていたようである。

欧米諸国の経済が順調なときは、問題(作品の価格)が表面化しない。しかし、経済に陰りが出始めると、途端に売上に響いてくるのは世の常である。いわゆる日本趣味もあつてか、幸いにも日本の売上については順調に伸びていたようであるが、他の国々の売上状況から暗い影が忍び寄りつつあることが伺われる。

「安特堤博覧会景況(農商務省報告)

和蘭(\*オランダ)国安特堤府(\*アムステルダム)万国博覧会場ハ七月末ヨリ縦覧人日ニ著シク増加シ随ヒ我カ区ノ売品モ自ラ好景氣ニ趣ケリ価値ハ各国ノ物品ニ比スレハ不廉ナリトノ評論アレトモ此等ハ全く其ノ精巧ヲ知ラサルモノ、説ニテ概スルニ世評ハ大ニ宜シキ方ニ傾向セリ(註10)

(五) 本博覧会における日本の評価

本博覧会における他の国々の状況が不明のため日本の正確な位置というものは定かでないが、次の「安特堤府博覧会出品売上高(農商務省報告)」からも分かるように、日本の売上額は他の国々に比べてかなり大きい数字を残したものと考えられる。

ところで、この記録には売上高の上位七位までが明記されているが、その多くは焼き物(陶磁器及び七宝焼)の關係である。他の物品も出品されたのかかわらず焼き物に関心が集まったのか、一点あたりの価格が焼き物の場合は群を抜いていたのか、ほとんど焼き物を中心に出品されたのか、あるいは他に理由があつたのかは分からない。

「安特堤府博覧会出品売上高(農商務省報告)

和蘭国安特堤府(\*アムステルダム)博覧会事務官長桜田親義ヨリノ公信ニ據レハ該会開場即昨年五月一日ヨリ同十月廿九日迄ノ売上高ハ蘭貨拾万「フロラン」余ニ達シ閉場後モ多少ノ売品アリタルヲ以テ總計凡五万弗(\*ドル)以上六万弗未滿ノ売却高トナルヘシ抑々今回ノ博覧会ハ各国共大ニ当初ノ見込ニ違ヒ多分ノ損失ヲ被リシニ我カ区ハ受賞者並ニ売却金額共出品高ニ対シ第壹等ノ好結果ヲ得タリ且假令現在ノ利益ハ渺シトスルモ出品中後來販路ノ見込アルモノ尠カラス茲ニ五月一日ヨリ十月廿九日ニ至ル各出品人売上ケ金高ヲ詳記スレハ左ノ如シ

- 一 蘭貨三万貳千フロラン 円中文介
- 一 同 三万 フロラン 名産会社
- 一 同 壹万七千フロラン 七宝会社
- 一 同 壹万七千フロラン 工商会社
- 一 同 六千フロラン 精磁会社
- 一 同 三千百七拾フロラン 円中売店ニテ中村一吉
- 一 同 八百フロラン 丹山陸郎

合計蘭貨拾万五千九百七拾フロラン

此ノ正貨四万貳千三百八拾八円

但シ壹フロランハ我カ正貨四拾銭ノ割合ナリ（註11）

また、本博覧会においては次の記録「安特堤府博覧会褒賞（農商務省報告）」にあるような受賞が見られた。

この受賞が他の国々に比べて多いのか少ないのか定かではないが、この中には前述の売上高に関わる人物・会社の他にも、香蘭社（註12）・錦見山宗兵衛（註13）・高橋道八（註14）・幹山伝七（註15）・真葛香山（註16）・清水六兵衛（註17）・瀬戸磁工社（註18）・帶山与兵衛（註19）・瀧川惣助（註20）など当時の日本焼き物（陶磁器及び七宝焼）界を代表する名工や商社が多く含まれている。

「安特堤府博覧会褒賞（農商務省報告）」

安特堤府博覧会（\*アムステルダム）ニ於テ本邦ノ出品物ハ其ノ高二応

シテハ利益多ク且注文ヲ受ケシモノ尠カラス今審査ノ未褒賞ヲ受ケタル

者ヲ掲クレハ左ノ如シ

一名誉賞状	文部省	一全	燈台局	一全	京都府	錦見山宗兵衛	一全	佐賀県	精磁会社
一全	横須賀造船所	一全	水路局	一全	京都府	七宝会社	一全	京都府	丹山陸郎
一全	山林局	一全	参謀本部	一全	京都府	磯谷利三二	一全	石川県	松島社
一全	衛生局	一全	印刷局	一全	京都府	紹美栄助	一全	東京都	榛原直次郎
一全	山梨県勸業課	一全	陶器出品人中	一全	東京都	起立工商会社	一全	東京都	渡辺シヨーテイ
一全	石川県	一全	七宝会社	一全	三重県	伊藤小左衛門	一全	福島県	二本松製糸会社
一全	起立工商会社	一全	名産会社	一全	群馬県	福田森太郎	一全	東京都	東京府庁
一全	神奈川県	一全	名産会社	一全	神奈川県	椎野正兵衛	一全	東京都	巨市兵衛
一全	斎藤善兵衛	一全	内藤朝政	一全	東京都	起立工商会社	一全	東京都	牧野長右兵衛
一金牌東京府	山本清蔵	一全	山梨県	一全	東京都	宮下主枝	一全	東京都	
一全	石川県	一全	京都府	一全	東京都	岡本正樹	一全	神奈川県	斎藤善兵衛
一全	起立工商会社	一全	長崎県	一全	香蘭社				

一全	神奈川県	井村彦三郎	一全	東京府	起立工商会社
一全	東京府	松本芳延	一全	東京府	山本清藏
一全	静岡県	矢沢久右衛門	一全	東京府	江木松四郎
一全	山梨県	風間伊七	一全	福島県	大橋佐次兵衛
一全	福島県	大橋濟	一全	宮城県	鈴木十五郎
一全	群馬県	須田藤次郎	一全	群馬県	横山嘉平
一全	東京府	榛原直次郎	一全	東京府	丸与三郎
一全	東京府	淵上理作	一全	山梨県	大藤松五郎
一全	褒状東京府	曾我徳丸	一全	東京府	矢野壽光
一全	京都府	児島定七	一全	栃木県	塩山元一郎
一全	群馬県	大沢嘉兵衛	一全	群馬県	横山久四郎
一全	神奈川県	椎野正兵衛	一全	神奈川県	加太八兵衛
一全	東京府	野村勝守	(註21)		

### 三 陶磁器の輸出状況

海外における博覧会で数々の入賞を果たしていた日本の焼き物（陶磁器及び七宝焼）を、欧米人はどのように見ていたのであろうか。

その一端が、次の記録「日本陶器品評（在横浜亜米利加総領事ファン、ブレード記）」によって知ることができる。なんといってもこの記録者が在横浜亜米利加総領事ということから、信頼性の高いものであると考えられるが、新旧を問わず日本の焼き物（陶磁器及び七宝焼）は欧米人の収集対照となっていたようである。古陶磁（特に薩摩・伊万里・瀬戸・九谷）は大変注目されてきたようであるが、ここで特筆したい点は総領事が明治の焼き物（当時としては現代の作品）を大変高く評価しているということである。

欧米人の好み（完成度の高さ）からすれば改良の余地はあるものの、世界的に高い水準の作品を日本が生み出していたということが分かる。

#### 「日本陶器品評（在横浜亜米利加総領事ファン、ブレード記）」

日本ノ古陶器殊ニ薩摩、尾張、今利、九谷焼ハ世ノ最珍重スル所ニシテ苟モ鑑識家ヲ以テ自ラ任スル者ハ競ヒテ之ヲ買取ス然レドモ余ヲ以テ之ヲ見レハ近時ノ陶器ハ却テ其ノ光沢彩色共ニ古陶ノ右ニ出テントスルノ傾向アルカ如シ唯日本ノ陶器ニ就テ遺憾トスル所ハ各品其ノ形体ノ不規則ニシテ且一組ノ内ト雖往々其ノ形ヲ異ニスルノ弊アリ蓋此ノ弊ハ之ヲ製造スルニ当リテ機械若クハ模型ヲ用ヒス且竈中熱氣ノ周到セサルニ由ルモノトス然レドモ其ノ光沢彩色甚美ニシテ且一種他国製造ノ陶器ニ異ナルモノアルヲ以テ其ノ短所アルニ拘ラス人ヲシテ称賛シテ之ヲ購ハシム故ニ若シ日本陶器ニシテ一層製造ニ注意シ勉メテ此ノ短所ヲ矯正スルアラバ其ノ製造ノ隆盛ニ至ルヤ必セリ近來歐羅巴（\*ヨーロッパ）ニ於テ製造シタル陶器ニ日本人ヲシテ画カシメタルモノ往々之アリ是ヲ以テモ將來日本陶器ノ隆盛ヲ知ルヲ得ヘシ余頃日愛知県下瀬戸ノ陶器製造所ニ至リ土塊ヨリ漸々美麗ナル陶器ノ出来スル迄ノ始末ヲ親シク実見シタリ元來此ノ土地ニアル粘土抗ハ殆二千年前ヨリ掘取リシ由ナルカ其ノ層ノ大ナル今ニ至リテ尚僅ニ其ノ表面ニ鍍ノ触レタルカ如キ状ヲナセリ又陶器ノ着色ニ用フル「箇巴爾土」モ其ノ最近ノ地ニアリテ質甚善良ナリ然レハ機械ヲ用ヒテ大ニ製造ニ従事セハ容易ニ欧州ノ需要ニ応スルヲ得ヘシ彼ノ北米合衆国ヨリ毎年歐羅巴へ輸入スル陶器ノ数ハ貳千四百万個内外ニシテ陶器ノ需要ノ欧州ニ大ナルヲ見ルヘシ故ニ日本ニシテ其ノ製造ニ注意セハ陶器ノ輸出ハ遂ニ此ノ貳千四百万個中ノ一大部分ヲ占ムルニ至ルヘシ（四月十五日刊行維也納東洋博物館月報）（註22）

また、次のロシア・ウラジオストックにおける貿易の近況を伝える記事「日本国産商況（在海參威港貿易事務官報告）」からは、ロシア極東地域でも価格の安い製品（焼き物）の需要があったことが分かる。

つまり、日本の焼き物の場合、高級な美術工芸品は欧米の王侯貴族を対象

に、廉価な量産品は周辺地域に輸出されていたのである。

「日本国産商況（在海參威港貿易事務官報告）

（前略）

陶器磁器ノ内高尚ナル品ハ本国へ便宜ノ節稀ニ需要者アリ日用具ノ茶器類ハ其ノ形ヲ異ニシテ且其ノ価格不廉ナレハ欧州製ヲ以テ足レリトス  
下等ノ植木鉢類ハ多少売捌ケアリ

（後略）」（註23）

ところで、前出の在横浜並米利加総領事の提案に答えるかのように、焼成段階の安定性をより高めるため、日本の焼き物（陶磁器及び七宝焼）界は政府の援助のもと石炭窯の実験に入っている。

指導するのはドイツ人ワグネル（註24）、実験に携わるのは加藤友太郎（註25）であった。

この研究成果は、後に全国の焼き物（陶磁器及び七宝焼）に急速に取り入れられていくことになる。ちなみに、岐阜県の場合、石炭窯の実験が開始されたのは明治三六年（一九〇三）の土岐郡立陶器学校であり、広く一般に普及するのは明治末から大正にかけてのことであった。

「陶器窯新設（農商務省報告）

地質調査所ニ於テ陶器工東京牛込区新小川町二丁目八番地加藤友太郎ヲシテ明治十五年六月独逸（\*ドイツ）人ゲ、ワク子ルノ創意ニ係ル陶器窯ヲ築造セシメ其ノ陶窯ト本邦固有ノ陶窯トヲ比較対照シ第一築造ノ難易第二焚法ノ難易第三燃料ノ消費ヲ試験セシニ左ノ結果ヲ得タリ

第一 築造ノ難易

本邦固有ノ陶窯ヲ築造スルニハ予メ適宜ノ地ヲ撰定シ先ツ竹片ヲ用ヒテ窯形ノ骨子ヲ製シ耐火粘土ヲ練リ以テ其ノ内外ニ塗ル其ノ形不規率ナル楕円状ニシテ十ヲ製スレハ十皆其ノ形体ヲ異ニシ更ニ定則ナシ且内部ニ凸凹ヲ生シテ平滑ナラス是ヲ以テ新ニ陶窯ヲ造ルモ数回ノ試験ヲ經サレ

ハ陶器ノ焼用ニ供スル能ハスト云フ元來陶器ノ良否ハ窯ノ内部ニ関スルモノナリ然ルニ前ノ如ク不完全ノ方法ヲ以テ善良ノ陶窯ヲ築クハ実ニ難事ト云フヘシ從來ノ陶業家云ヘルアリ新窯ハ善良ノ陶器ヲ製スル能ハスト宜ナル哉此ノ如キ方法ヲ以テ新ニ築キタル陶窯ニ就キ初ヨリ善良ノ陶器ヲ焼成セント欲スルハ到底得ヘカラサル所タリ今 ワク子ルノ創意ニ係ル陶窯ハ之二反シテ其ノ形規率製育ニシテ動ス可カラス故ニ一ノ図式アレハ設令何等ノ工手ト雖容易ニ之ヲ築造シ得ヘシ現ニ友太郎ノ如キ既ニ ワク子ルノ指示ヲ受ケ之ヲ左官職ニ授ケ容易ニ其工ヲ竣ヘタリ  
新古両窯築造ノ費用タル固有窯ハ粘土ヲ以テシ新窯ハ煉石ヲ以テスレハ勿論相比較スヘカラサルカ如シト雖聞ク所ニヨレハ尾州瀬戸村ニ於テ築ク所一窯ニ付五拾円乃至百貳拾円ヲ要スト蓋瀬戸村ニ於テハ其ノ材料タル粘土等總テ其ノ地方ニ産出シ之ヲ他ニ求めサルカ故ニ冗費最少シト雖之ヲ東京等ニ築カハ決シテ瀬戸村ノ比ニアラサルハ言フ俟タス今 ワク子ルノ窯ハ金八百円余ヲ消費セリ蓋此ノ消費中百余円ハ全ク土地ノ湿度ヲ防止スル為ニ消費セシヲ以テ窯ノ消費ニ係ル者ハ七百円内外ナリ之ヲ以テ彼ニ比セハ一窯ニ付六百円内外ノ差アリト雖彼ノ瀬戸村ナルハ一度築造シ一箇年何回使用シテ何箇年ヲ保ツヤ且消費スル所ノ燃料幾何ナルヤ之ヲ新窯ト対照比較スルヲ待チテ能ク其ノ得失ヲ弁知ス可シ

第二 焚方ノ難易

本邦固有ノ窯ニ燃料ヲ投入スルニハ窯ノ両側ニ設クル小孔ヨリス然ルニ之二投入スル実ニ至難ニシテ熟練ノ老手ニアラサレハナス能ハス故ニ瀬戸村等ニ於テモ窯焚ト唱ヘテ特ニ燃料ヲ投入スルヲ以テ業トスル者アリ蓋投材ハ窯業中最至要ナルモノニシテ忽ニスヘカラス假令製造家ト雖老工ニ非サレハ手ツカラ其ノ業ヲ執ル能ハスト其ノ難キ知ルヘキナリ然ルニ新設ノ窯ハ焚燃ノ法実ニ容易ニシテ婦人小兒ト雖直ニ之ヲ成スヲ得ヘシ又窯中ノ熱度モ執業者ノ意ニ随ヒテ上下左右スルヲ得ヘシ現ニ友太郎



ノ如キ今回始メテ此ノ窯ニ従事セシモ容易ニ之ヲ焚焼シ得ルヲ以テ亦其ノ業ノ難事ニアラサルヲ察知スヘシ

既ニ前陳セシ如ク固有窯ニハ内部ニ凸凹アリテ平滑ナラサルカ為ニ熱ノ平均ヲ得ス一方ハ強キニ失シ一方ハ弱キニ失スルノ害往々之アリ故ニ若シ巨大ナル物品ヲ焼成スルニハ最注意ヲ加ヘ予メ三十時間熱氣ヲ含有セシメ然ル後徐々熱度ヲ増加スト雖尚熱度ノ急進スルニ遭ヘハ物品為ニ破碎スル事数リ之アリ新設ノ窯ハ之ニ反シ其ノ内部平滑ナルノミナラス容積及火焚口、引焰口、等ニ至ル比例最適ナルカ為ニ窯中ニ熱度ノ変差アル事ナシ故ニ巨大ノ物品ヲ焼成スルモ敢テ破碎ノ患ヲ見ス会テ御所ニ於テ御使用ノ巨大ナル「マツフル」ヲ焼成セシカ如キ是ナリ蓋此方法ニ因リテ新舊窯法ヲ對比セハ其ノ得失ハ容易ニ弁知スルニ足ルヘシ

### 第三 燃料ノ消費

燃料ヲ消費スルニ新古ノ両窯ヲ比較スル事頗難シトス試ニ茲ニ新設スルモノハ最小ナルモノナリ都テ瀬戸村等ニ設置スルモノハ概シテ大ニシテ且形状ノ不正ナルカタメ其ノ容積ヲ知ル事能ハス況ヤ燃料ノ多少ハ窯ノ大小ニ準スルヤ否ヤ亦未知ルヘカラサルニ於テヤ当府下浅草区内ニ一所ノ陶窯アリ其ノ容積殆ト新設ノモノト同一ナリ聞ク此ノ窯一度焚焼スル燃料ハ五百束ナリト今此ノ新窯ニ焚焼シタルモノハ二百束余ナリ又江戸川陶器所ノ窯納富某ノ築造ニ係ルニハ三百五十束ヲ消費シタルモワク子ル 創意ノ法ニ改良セシヨリ僅ニ百八十束乃至二百束ヲ以テ足レリト是ヲ以テ視レハ蓋新設窯ニ消費スル燃料ハ固有窯ニ消費セシ半額ヲ以テ足レリト是又新舊窯ヲ對比シテ以テ其ノ是非得失ヲ弁知スルニ足ルヘキナリ

今単簡ニ之ヲ再陳スレハ ワク子ル ノ創意ニ係ル陶窯ハ固有窯ニ比スレハ第一多額ノ費用ヲ要スルニ似タリト雖第二焚方簡易ニシテ且窯中ノ熱度均平ナルカ為ニ製品破碎ノ患ナク第三燃料ヲ消費スル僅ニ従来ノ半

額ヲ以テ足レリトス抑々此ノ第二第三ノ利ハ以テ第一ノ築造ニ要スル多額ノ費用ヲ償ヒテ余裕アルヲ見ルハ実ニ容易ナル可キナリ」(註26)

### 四 焼き物(陶磁器及び七宝焼)産地の状況

この時期、政府や県当局は焼き物(陶磁器及び七宝焼)産地の概略を把握するためなのか、現地の調査を行っている。

海外にも広く知られた九谷の場合は、次の記録「九谷陶窯沿革(農商務省報告)」(「能美郡陶窯沿革(農商務省報告)」からも分かるように農商務省が調査を実施しているが、歴史的な流れから始まり、窯の規模(焼成能力)及び労働力(従事している人数)まで把握している。また、この時期に九谷焼の画風が変化していることにも注目している。

#### 一 九谷陶窯沿革(農商務省報告)

石川県ニ於テ陶窯ノ九谷ト称スル者数処ニアリト雖真ノ九谷陶窯ノ沿革ヲ調査スルニ左ノ如シ

陶窯初代 慶安年中(\*一六四八〜五二)大聖寺(\*だいしょうじ)藩主第一代前田利治加賀国江沼郡大日山ノ麓九谷村字下村ニ良質ノ磁石アルヲ聞キ藩士後藤才次郎、田村権左衛門ノ貳人ニ命シ陶窯ヲ九谷村ニ築キ陶器ヲ製造セシム是ヲ九谷焼ノ濫觴トナス然レトモ当時苦窳多クシテ精良ノ磁器ヲ製出スル事能ハス第二代ノ藩主前田利明前代ノ志ヲ紹キ後藤才次郎ヲ肥前国唐津二遣シ製陶術ヲ講習セシメタルニ唐津ニ於テハ深く陶法ヲ秘シ容易ニ其ノ法ヲ窺フヲ得サリケレハ才次郎ハ身ヲ委シテ陶家ノ傭奴トナリ労役スル事三年漸ク家主ノ信用ヲ得其ノ媒介ヲ以テ妻ヲ娶リ永住ノ体ヲ示セシカハ遂ニ家主ノ許容スル所トナリテ陶業ニ従事シ居ル事四年勉倦マス普ク製陶ノ秘訣ヲ知悉スル事ヲ得タリ業既ニ成リ俄然妻子ヲ捨テ大聖寺ニ逃帰リテ之ヲ復命シ其ノ後九谷村ニ至ラントシ吸坂(\*すいさか)ヲ過クル時偶々路傍ニ良質ノ陶土アルヲ見乃其ノ土

ヲ採リテ九谷ニ送り陶器料ニ供スルニ果シテ良好品ナリキ現今吸坂村ニ秘蔵スル所ノ仏座ノ蓮台ハ其ノ試焼ニ係ルモノナリト云フ是ヨリ九谷陶器ノ製造大ニ進ミ又當時有名ノ画工久隅守景ヲ同国金沢ヨリ招キ陶画ヲ描カシメ陶工画手両ナカラ相備リ頗ル精巧ノ域ニ達セリ後世古九谷焼ト称シ最貴重スル所ノ者ハ蓋此ノ時代ノ製造ニ係ルモノナリ

陶窯二代 文化初年（\*一八〇四）大聖寺ノ商売吉田屋八右衛門古九谷焼ノ既ニ廃絶ニ歸スルヲ嘆キ同年六月再九谷ノ陶窯ヲ修理シ後藤田村ノ遺法ニ據リテ専ラ支那交趾（\*こうし）風ノ陶器ヲ製出ス是ヲ九谷ノ中興トス然ルニ九谷ノ地タルヤ大日山ノ麓ニ在リテ道路険悪運搬便ナラサルヲ以テ同十一年陶窯ヲ山代村ニ移シ九谷ノ磁石、吸坂ノ陶土ヲ採リ盛ニ其ノ業ヲ営メリ世之ヲ称シテ吉田屋陶ト云ヒ其ノ声価古九谷ニ垂ケリ

陶窯三代 吉田屋八右衛門ニ嗣キテ起リタル者ハ宮本屋理右衛門ナリ初メ理右衛門ノ弟宇右衛門吉田屋製陶所ノ管理者タリシカ一朝病ニ罹リテ死去セシヨリ製陶所モ漸ク衰微セシヲ以テ天保六年（\*一八三五）其ノ兄理右衛門吉田屋ヨリ陶窯ヲ譲リ受ケ之カ改良ヲ図レリ此ノ時ニ際シ飯田屋八郎衛門ト称スル画工アリ九谷固有ノ赤色ニ據リ更ニ一種ノ工夫ヲ出シ赤顔料ニ金彩ヲ加ヘ以テ一層ノ美觀ヲ呈シ殊ニ越前国敦賀氣比宮宝蔵ノ方氏墨譜ヲ得テヨリ頓ニ画風ヲ変シ更ニ古雅鮮明ナル陶画ヲ抽出セリ抑々飯田屋ハ赤面ニ金粉ヲ施シ錦様ノ彩色ヲナスノ鼻祖ニシテ遂ニ九谷一定ノ画風ヲ造為シ爾來郡ノ内外ヲ問ハス苟モ此ノ風ヲ学フモノハ都テ之ヲ九谷ト唱ヘ以テ世間ニ流行スルニ至レリ方今能美郡及金沢区ニ於テ九谷何々製ト刻銘スルハ皆飯田屋ノ末流ヲ汲ムモノナリ蓋赤面ノ発明ハ今ヲ距ル事六十余年ノ前ニ在リ現時九谷陶器会社社主中浅井幸八ノ如キハ親シク八郎衛門ニ就キ指教ヲ受ケタリト云フ

陶窯四代 往時大聖寺藩ニ於テ物産役所ヲ設ケ工業ヲ興起セントスルニ

当リ山代村住人三藤文次郎藤懸八十城ノ貳人ヲシテ製陶所ヲ掌ラシメ資本金若干ヲ貸与セシニ右貳人相謀リテ慶応三年（\*一八六七）陶工永樂善五郎ヲ聘シ専ラ製品ノ改良ヲ図リシカ永樂ノ山代ニ居リテ此ノ業ニ従フヤ僅ニ五年ニ過キサリシニ其ノ間陶形面様両ナカラ進歩ノ功ヲ奏セリ故ニ世人其ノ製ヲ名ケテ永樂窯ト云フ偶々藩政ノ改革アリテ陶窯ノ維持ニ苦シミ三藤藤懸等ハ数年ナラスシテ窯業ヲ將テ他ニ讓与スルニ至レリ

陶窯五代 三藤々懸ニ嗣キテ起リタル者ハ塚谷浅、大蔵壽樂貳人ナリ是ヨリ先永樂ハ既ニ去リ陶窯モ亦衰微ニ趨クニ当リ塚谷ハ當時職ヲ物産所ニ奉セシカ大ニ陶業ノ衰微ヲ憂ヒ明治四年（\*一八七〇）遂ニ三藤ヨリ窯場ヲ譲受ケ又壽樂ハ初メ三藤等ノ陶工タリシカ同六年藤懸ノ窯ヲ譲受ケテ各其ノ主トナリ塚谷ト共ニ力ヲ此ノ業ニ盡シ専ラ其ノ改良ヲ勉メタリ

陶窯六代 明治十二年千阪高雅石川県令トナリテ赴任ノ際九谷本窯ノ萎靡振ハサルヲ嘆キ飛鳥井清ニ陶業恢復ノ事ヲ説諭シ且肥前有田ノ陶場ニ派遣シテ之ヲ実見セシム又清ニ貳千五百円ノ資金ヲ貸与ス清更ニ株主ヲ募リ九谷陶器会社ヲ創立シ塚谷、大蔵等カ所有ナル陶窯ヲ譲受ケ塚谷ノ男六三郎及大蔵壽樂ヲシテ陶工部ヲ管理シ画工竹内吟秋浅井一毫ヲシテ画工部ヲ管掌セシム是ニ於テ工手画家共ニ其ノ選ニ適シ改良ノ効頗ル著シク方今盛ニ其ノ業ヲ営ムニ至レリ

抑々三代宮本屋ノ頃ヨリ古九谷画様ハ隠埋シテ金彩絵章ノ燦爛タルニ廠ハレ世人ハ却リテ金彩ヲ以テ九谷ノ本色トナスニ至リシカ陶器会社創立以來新様流行シテ古色ノ埋没スルヲ嘆キ竹内吟秋ヲシテ古九谷ノ彩具ヲ点検シ画様ノ形状ヲ摸倣セシム吟秋刻苦勉勵之ヲ試験スル事数十回近來稍其ノ真ニ髣髴タル事ヲ得ルニ至レリ（註27）

「能美郡陶窯沿革（農商務省報告）」

石川県加賀国能美江沼ノ貳郡ハ陶器ノ産出頗ル多ク概シテ九谷陶器ト称

シ郡名ヲ以テ之ヲ分チ能美九谷、江沼九谷ト唱フ然レトモ能美陶窯ハ其ノ由来スル所実ニ九谷ノ流派ニアラスシテ元ト独立ノ製造ニ係レリ今其ノ濫觴ヲ繹ヌルニ昔肥前国有田郡島原二本多貞吉ト云ヘル者アリ頗ル陶業熟達ノ者タリシカ一旦故アリテ郷里ヲ去リ諸国ニ漫遊シテ遂ニ加賀国金沢ナル春日山ノ陶家ニ投シ其ノ業ヲ施シ後移リテ能美郡若杉村ニ来リ村長林八兵衛ノ家ニ寓居セル事久シウシテ近郷花坂村字六兵衛山ニ於テ磁石ヲ発見セリ是今ヲ距ル事百余年前即安永八年（\*一八六一）ノ事ニ係ル其ノ後八兵衛ハ有田風ノ円窯ヲ若杉村ニ築キ貞吉ヲシテ其ノ業ヲ営マシメシニ京都人寅吉平戸人平助等（貳人共姓不詳）来リテ業ヲ共ニシ茲ニ始メテ青花（ソメツケ）ノ陶器ヲ焼成セシカ其ノ形状描画精妙ナルヲ以テ時人大ニ之ヲ感賞シ来リテ其ノ術ヲ学フ者年々ニ増加シ金沢人八兵衛九兵衛貳人ノ如キ最其ノ技ニ達シタリト云フ初メ林八兵衛ノ陶窯ヲ造ルヤ金沢藩主前田家ヨリ其ノ資本若干ヲ助ケシカ得失相償ハス殊ニ貞吉死去ノ不幸アリテ為ニ文政五年（\*一八二二）其ノ業ヲ止メ陶窯ヲ拳ケテ前田家ノ所有ニ帰セリ爾後前田家ニ於テ之ヲ金沢人橋本屋安兵衛ニ与ヘシカハ安兵衛ハ若杉ニ移リ八兵衛九兵衛等ヲシテ青花或ハ白磁ノ類ヲ製造セシメシニ偶々肥前人勇次郎（姓未詳）来リテ業ヲ執レリ其ノ赤陶画ヲ能クスルヲ以テ人呼ビテ赤画勇次郎ト称ス天保七年（\*一八三六）陶工八兵衛更ニ近郷花坂村字新山ニ於テ磁石ヲ発見シ又同村字八牧田ニ於テ陶土ヲ発見シ其ノ業漸ク盛大ナラントスルニ際シ不幸ニシテ窯室火災ニ罹リタルヲ以テ同年中窯ヲ近隣ノ八幡村字土山ニ移シ専ラ其ノ業ヲ営ミシモ爾后数年ナラスシテ遂ニ廃業スルニ及ヘリ是ヨリ先天保（\*一八三〇〜四四）ノ初メ能美郡小野村ニ藪六右衛門ト云フ者アリ始メテ登窯（ノポリカマ）ヲ開キ貞吉ノ門人粟生忠助等ヲシテ主トシテ白磁ヲ造リ傍ラ青花ヲ焼カシム九谷庄三郎、斎田伊三郎、松屋菊三郎、板屋甚三郎等之カ画工タリ其ノ用フル所ノ材料ハ五箇寺、鍋谷、佐野、三村ノ磁

石及佐礫其ノ他諸村ノ概灰等ニテ製品稍精巧ナルカタメ時人呼フニ九谷ノ名ヲ以テス六右衛門、業ヲ営ム事二十余年ニシテ同郡一針村善太夫ニ譲ル善太夫亦十余年ニシテ廃業ス此ノ地天保ノ末陶業漸ク起リ角屋作兵衛ハ徳山村ニ粟生屋源左衛門ハ連代寺村ニ各陶窯ヲ築キ数多ノ工人ヲ養成シタルヲ以テ安政（\*一八五四〜六〇）万延（\*一八六〇〜六一）ノ頃ヨリ若杉、小野、佐野等ノ諸村ハ到ル所陸續トシテ窯室ヲ築キ現今其ノ数貳拾余箇所ノ多キニ及ヘリ先ツ其ノ略ヲ挙クレハ千木野村ハ壹窯四室ニシテ一年間使役ノ工人凡四百七拾人、若杉村ハ貳窯拾三室ニシテ同上工人凡六百八拾人、八幡村ハ一窯四室ニシテ同上工人凡五百三拾人、植田村ハ貳窯拾室ニシテ同上工人凡五百四拾人、小野村ハ壹窯六室ニシテ同上工人凡五百五拾人、佐野村ハ貳窯拾室ニシテ同上工人凡六百貳拾人、湯谷村ハ壹窯四室ニシテ同上工人凡四百五拾人、来丸村ハ壹窯七室ニシテ同上工人凡四百貳拾人、徳山村ハ壹窯五室ニシテ同上工人凡五百人、和氣村ハ壹窯五室ニシテ同上工人凡六百人ナリ（註28）

古い歴史を誇る常滑の場合は愛知県当局が調査・報告をしているが、伝承から始まって歴史を述べるとともに、海運に恵まれて出荷が順調に伸びていたこと、新商品（ぶどう酒の容器）の開発に成功していたことが分かる。

#### 「常滑陶器（愛知県報告）」

愛知県屋張（※ママ）国知多（\*ちた）郡常滑（\*とこなめ）村ハ往昔ヨリ陶器製出ノ地タルカ今其ノ起源ヲ尋ヌルニ千五十年前即天平（\*七二九〜四九）年中行基菩薩ノ土器ヲ創製セシニ昉レリ現今猶山間ニ於テ其ノ築窯ノ址ヲ徴ス可シ其ノ後二百余年ヲ経テ延喜（\*九〇一〜三三）年中ニ至リ土師左衛門ト云フ者アリ菅原英比丸ニ随ヒ此ノ地ニ来リ英比丸ノ死スルニ及ビ止リテ村中ニ住シ行基菩薩ノ遺址ニ就キ窯ヲ起シ土器ヲ焼造スルヲ以テ業トス正応（\*一二八八〜九三）年中源義孟ト云フ者会テ奥州鯉江ノ郡代タリシカ故アリテ此ノ地ニ来リ土師ノ家ニ寄食シ尋

イテ之カ養子トナリテ陶業ヲ相統シ姓ヲ改テ鯉江ト称ス安德天皇ノ時ヨリ崇光天皇ノ時ニ至ル迄十八世ノ間常ニ其ノ製造スル所ノ土器ヲ宮中ニ献上セシト云フ当時機具技術共ニ精備ニ至ラス窯製亦完全ナラサリシヲ以テ数回ノ経験ニ依リ漸ク瓶窯ヲ設クルヲ得之ヲ従来ノ窯ニ比スレハ稍完全ノ状ヲ具フ文化（\*一八〇四〜一八）年中義孟ノ後ニ鯉江方救ト云フ者アリ一ノ新窯ヲ工夫シ数十年間之ヲ試験セシト雖其ノ志ヲ果ス能ハス其ノ子方壽父ノ志ヲ継キ窯製改革ヲ以テ畢生ノ目的トナシ種々ノ考按ヲ費シ天保（\*一八三〇〜四四）年中ニ至リ遂ニ新窯ヲ造作スル事ヲ得タリ現時用フル所ノ諸窯ハ全ク其ノ規模ニ則トル者ナリ元来此ノ村ノ製陶ハ鯉江一家ノ專業ニ属セシカ現時ノ戸主高司ニ至リ（方壽ノ子）能ク父祖ノ志ヲ継キ頗ル力ヲ陶事ニ盡シ陶器ノ需要益々広マルニ伴ヒ村人此ノ業ヲ営ムモノ亦次第ニ多ク今日ニ及ヒテハ闔村中ノ窯數三拾余基、工人千百余人、毎年製出スル所ノ器物數拾万個ノ多キニ至レリ抑々常滑ノ地タルヤ名古屋ノ南拾里程ニ在リテ海ニ瀕シ運輸頗ル便利ナルニヨリ其ノ製出スル所ノ水道管、水瓶、茶器、茶瓶、及各種ノ瓶、壺類ハ直ニ之ヲ船舶ニ搭載シテ諸州ニ送ル事ヲ得ルナリ現時商船ノ来往スル者多クハ此ノ地ノ陶器ヲ輸売スルモノニ係ル近來有志者一社ヲ結ビ陶弘社ト称シ其ノ製造並ニ売買上ノ改良ヲ図ラント欲スル企アリ又同郡小鈴谷（\*ここがや）村ニ盛田久左衛門ト云フ者アリ近年葡萄酒ヲ開キ大ニ葡萄酒釀造ノ業ヲ起サントス將來葡萄酒ヲ製出スルニ至ラハ之ヲ盛ルニ常滑陶器ヲ以テセン事ヲ鯉江高司ニ謀ル高司工夫ヲ凝シ遂ニ一種ノ酒罫ヲ發明セリ他日釀酒成ルノ日ニ及ハ、大ニ之ヲ製造スルニ至ル可シ（註29）

良品を出荷することで知られた瀬戸の場合は、ほとんどの住民が陶磁器産業で生計を立てていたことが分かる。

窯元と呼ばれる事業主はいたものの、そのほとんどは零細であった。しかし、名工と呼ばれる人々を数多く輩出したことよって海外の博覧会で多く

入賞を果たし、美術工芸品の制作による輸出に主眼が置かれるようになっていた。ところが、欧米の経済にかけりが生じて輸出が振るわなくなったときには、すでに国内市場は他の陶磁器産地に占拠されていて、新しく参入することが困難な状況に陥っていた。

そのような状況下において、瀬戸は製品陳列館を設けて新旧の作品を閲覧に供し、美術学校を開設して後継者の育成を図ろうとしたのである。また、加藤勘四郎（註30）らは、焼成技術の改良に着手していた。

#### 一 瀬戸窯（農商務省報告）

愛知県尾張国東春日井（\*ひがしかすがい）郡瀬戸（\*せと）村ハ名古屋ノ東六里ニアリ人家總數七百七拾壹戸内農業ヲナス者ハ僅々拾七戸ニ過キス余ハ皆陶磁業ニ従事シ自ラ陶窯ヲ所有スルモノ百五拾余戸アリ之ヲ称シテ窯元ト云フ其ノ大ナル者ハ職工三四拾名ヲ使傭ス其ノ他ハ數名ニテ一窯ヲ共有シ或ハ単ニ陶磁職工タリ此ノ地ハ往昔陶工ノミナリシカ文化（\*一八〇四〜一八）年間加藤民吉ト云ヘル者肥前国ニ遊ヒ磁器製造ノ術ヲ習ヒ得テ帰り始テ磁工ヲ起セリ方今右百五拾余戸中製陶家五拾戸ニシテ余ノ百戸ハ製磁ヲ業トス其ノ製造ニ供スル原質陶土ハ瀬戸村内ニアリテ村人随意ニ之ヲ採掘シ磁石ハ河内国加茂郡白川、折平広見ノ諸村ヨリ粉粹シテ輸送シ來ル所ノモノヲ用フ又器面ニ渲染スル所ノ顔料ハ其ノ産地ヲ御留山ト称シ往昔尾州家ノ採掘ニ係リ人民ハ私ニ之ヲ採ル事ヲ得サリシニ其ノ解禁以來濫ニ之ヲ採掘セシカタメニ産額大ニ減シ品位亦精良ナラサルヲ以テ専ラ舶來品ヲ用フルニ至レリ抑々維新前ニ在リテ尾州家ハ陶業ヲ保護スル頗ル厚ク瀬戸及赤津（\*あかづ）、品野（\*しなの）三村ノ窯場又ハ製造場ハ概シテ無役免許ノ地トナシ而シテ製出ノ陶器類ハ盡ク御用品ト称シテ名古屋堀川蔵所ニ納メシメ商人ト窯元トノ直取引ヲ嚴禁シ其ノ商權ハ専ラ尾州家ノ一手ニ歸シタリシカ種々ノ不便ヲ來シタルカタメ此ノ法ヲ改メ陶器商中ヨリ拾人ヲ選ミテ蔵元ト称シ之ニ

売買ノ事ヲ委ヌ嗣後加藤民吉カ磁器ヲ製出セシヨリ其ノ業次第ニ開ケ窯数モ頻ニ加リタルヲ以テ遂ニ制限ヲ設ケ三箇村ノ窯數ヲ貳百ト定メ瀬戸村ニ役所ヲ置キ蔵所ト称シ役員出張シテ窯方取締人立合ノ上顏料ハ勿論製造品ヲ買上ケ此ノ役所ヨリ望ノ者ニ払下ケタリ若シ京都江戸大坂等ノ商人ニシテ瀬戸陶器ヲ販売セント欲スル者アルトキハ尾州家ヨリ其身元ヲ糺シ其ノ家屋ヲ抵当ニ出サシメ而シテ後ニ産物売捌ヲ命ス但シ代金取集方ハ三所共蔵元出張所ヲ置キ之ヲ料理セリ陶器代金ハ入船後三十日内ニ取立テ其ノ趣ヲ名古屋ニ通知シ同所ヨリ其ノ地ニ廻ス可キ金員ヲ以テ振替ヘ之ヲ各荷主ニ交付スル事トナス凡前ノ如ク産品ノ運轉ヲ始メ為替方法ヲ行ヒ加之繰替資本ヲ貸下置キ切符ヲ使用シタル類ヨリ其ノ他製造者ヲ保護セシモノ少カラサルヲ以テ陶磁ノ業大ニ振起シ尾州瀬戸物ノ名海内ニ鳴リ陶磁器ヲ総称シテ瀬戸物ト云フニ至レリ然ルニ維新以来右ノ制度悉ク廢レ法ノ之ヲ節限スルナキカタメ明治二三年頃ニ及ヒ製造者次第ニ加リ産額モ亦随ヒテ増シテ海外博覧會ニ出品シテ其ノ褒賞ヲ受ケタルヲ以テ明治六七年頃ヨリ更ニ販路ヲ外国ニ開キ需要頓ニ多ク窯業頗ル振ヒ專ラ意匠ヲ輸出品ノ一方ニ傾ケ内国需用ノ製品ハ棄テ、顧ミサルカ如キ状ヲ呈セリ斯ヲ以テ内国ノ販路ハ他ノ陶家ノ為ニ占取セラレ明治十四年（\*一八八一）後ニ及ヒ漸次輸出品ノ減却セシタメ糺リテ供給ヲ内国ニ望ムニ及ヒテハ既ニ他ノ産品ノ充塞スルアリテ忽チ販路ノ停滞ヲ来シ一時困難ヲ極メタリ故ニ其ノ類勢ヲ挽回シ一ハ以テ陶工ノ参考ニ供シ一ハ以テ他ノ望ニ応シ製品ヲ販売シ且現品ニ照シテ多少ノ注文ヲ受ケンカタメ村中ニ製品陳列館ヲ設ケ新古各種ノ陶器ヲ陳列セントシ其ノ工事モ略々竣工ヲ告ケントスルニ臨ミ恰モ好シ加藤勘四郎外四名相謀リ工部大技長宇都宮三郎ノ説ニ從ヒ素焼小窯ヲ改修シ之ヲ試験シタリシニ大ニ新材ノ費消ヲ減シテ良好ノ結果ヲ得タリ若シ全村一致シテ窯製ヲ改修スルニ至ラハ一年ノ薪価約八万円中貳万円ノ減却ヲ見ル可キノ算当ナリ

是ヨリ先瀬戸村ノ陶工ハ内国勸業博覧會ニ於テ工部大学美術科ノ出品ヲ見テ深ク陶形彫刻ノ改革セサル可ラサルヲ悟リ去ル明治十五年四月美術学校ヲ村中ニ設ケ有志者ノ子弟拾余名ヲ入学セシメタリシカ不幸ニシテ商業不景氣ノ際生徒業ヲ修ムルノ暇ナク竟ニ翌年五月ヲ以テ閉校セリ然レトモ其ノ薫陶宜シキヲ得テ生徒ノ手術頓ニ進ミ爾來陶工ニ益スル事頗ル多キヲ見ルニ至レリ」（註31）



写真1 染付草花図獸耳付花瓶  
銘：◇勘製（加藤勘四郎）  
高19.7cm×口径12.6cm

この瀬戸における製品陳列館（陶器館）には欧州美術の参考品や瀬戸の新旧の名品が多数集められ、地域への貴重な情報提供施設になりうるものと、愛知県当局の期待も大きかったことが、次の記録「愛知県陶器館開場（愛知県報告）」から分かる。

一 愛知県陶器館開場（愛知県報告）

尾張国東春日井郡瀬戸村ノ陶器館建築落成ニ付同館ヘ仏蘭西（\*フラン）ス）製美術彫刻摸本及瀬戸村製古陶器類其ノ他現在陶工ノ製品等四百六拾五品ヲ陳列シ本月十日開館ノ式ヲ行ヒ県令国貞廉平属官ヲ卒ヒテ臨場シ陶工及陶器商業者等ト将来陶器改良ノ事ヲ懇話シ且左ノ演説ヲ為シタリ

陶器館経営ノ功ヲ竣ヘ愛ニ開場ノ典ヲ挙クルニ方リ大ニ諸氏ニ告クル所アラントス抑々陶器ノ濫觴ハ諸氏既ニ知ル所ナリト雖末流ノ盛衰ヲ論スレハ先ツ其ノ泉源ヲ深淺ヲ究メサルヲ得ス今ヲ距ル六百七拾余年前安貞年間加藤四郎左衛門春慶宋国ニ入り製陶術ヲ学ヒ帰朝ノ後各地ニ於テ試験シ終ニ当村ニ來リ適意ノ粘土ヲ発見シ陶窯ヲ創設ス爾來名工輩出シ天正年間ニ六作アリ永祿年間二十作アリ皆品位佳絶ニシテ都鄙紳士ノ賞玩スル所タリ又當時日用ノ器物ヲ製出シ世人ノ利用ニ供シ遂ニ陶器ヲ總称シテ瀬戸物ト云フニ至リシハ実ニ当村ノ榮譽ニシテ春慶氏ノ賜ト謂フ可シ降りテ享和年間ニ至リ南京焼ノ製法ヲ試ムルニ際シ加藤民吉ナル者奮然志ヲ起シ肥前有田ニ赴キ千辛万苦以テ該地ノ製造術ヲ学ヒ帰村ノ後一種ノ製法ヲ工夫シ新製染付ト称ス則現今ノ磁器ニシテ當時頗ル声価ヲ発揚シ製造高從前ニ陪從ス又明治六年澳洲博覧会以來漸次輸出ノ數ヲ加ヘ米仏其ノ他博覧会ニ於テ賞牌ヲ受ルノ名譽ヲ得明治十一年ニ至リ大ニ輸出ノ數ヲ増シ一ケ年ノ製造高三拾万円ニ登レリ諸氏ノ勉勵ニ係ルト雖亦加藤民吉ノ功偉ナリトス然ルニ何物ノ奸工カ此ノ時ニ際シ粗製濫造ノ器物ヲ出シ徒ニ外面ノ美麗ヲ飾リ固有ノ純美ヲ損シタメニ輸出ノ數ヲ減却シタルハ又諸氏カ自ラ招ク所ノ罪ト云ハサルヲ得ス有志諸氏既ニ意ヲ此ノ点ニ注キ先ツ各自ノ製品及模範トナルヘキ物品ヲ陳列シ其ノ沿革及精粗ヲ比較シテ互ニ共進ノ念ヲ発サシメ漸次画学ヨリ製陶一切ノ學術ヲ研究セン事ヲ謀リ今回陶器館ヲ建築シ本日開場ノ典ヲ挙ケ其ノ陳列スル所ノ出品既ニ四百六拾五点ニ及フヲ視ルニ將來必ス學術ト実業ト并行シ其ノ良結果ヲ得ルハ信シテ疑ハサル所ニシテ實ニ祝ス可キナリ然リト雖之ヲ既往ニ徵スレハ聊カ危疑無キ能ハス客年設立シタル美術ノ如キ其ノ功ヲ全クセス中途ニシテ生徒減少シ教師ニ厭棄セシメ終ニ廃止スルニ至リシハ予カ当村ノタメニ深く遺憾トスルモノナリ若シ從來ノ製造ヲ以テ最上ノ方法トナシ擬製ノ物品ヲ以テ精巧トナシ各自互ニ猜疑シ点詐利ヲ以

テ得策トスル事アレハ次第二世間ノ信用ヲ失ヒ職業ノ衰微ヲ招キ六百年來祖先ノ辛苦ニ出テタル偉業モ地ニ墜チ終ニ自滅ノ苦境ニ陥ルモ亦凶ルヘカラス是諸氏ノ常ニ警戒ヲ加フヘキ所ナラスヤ凡學術ハ直接ニ利益ヲ與フルモノニアラスシテ幾分ノ學費ヲ費シ富源ヲ將來ニ開クモノナリ夫レ諸氏カ勉ムル所ノ目的ハ需用者ノ意向ニ適スル物品ヲ製出シ我カ欲スル処ノ貨財ヲ得ルニ外ナラス而シテ近來仕向先ノ重ナルモノハ皆歐米諸州ノ文明圈ナレハ之二供給スル物品モ亦自ラ高尚ナラサルヘカラス又其ノ他ト雖人智ノ進歩スル好尚モ亦從ヒテ變換スルモノアルヘシ故ニ學術ヲ研究シ品質純良形容溫雅文飾精美ニシテ廉価ナル物品ヲ製スルハ工業家ノ急務ナラスヤ而シテ品質ノ純良ハ原料ノ精撰ニアリ原料ノ精撰ハ原質變化ノ律則ヲ究識スルニアリ原質變化ノ律則ヲ究識スルハ化学ニアリ形容ノ溫雅文飾ノ精美ハ美術ニアリ價值ノ廉ナルハ工費ヲ省クニアリ工費ヲ省クハ製造上ノ便利ヲ求ムルニアリ製造上ノ便利ヲ求ムルニアリ製造上ノ便利ヲ求ムルハ機械学ニアリ以上述フル所ノ三学科ハ工業上ニ於テ欠クヘカラサル事有志諸氏ノ既ニ知了スルモノナレハ漸次歩ヲ此ノ点ニ進メ今日予期スル所ニ達セハ販路次第ニ開通シ産額愈増加シ諸氏ノ富榮ハ予想ノ外ニ出ル事アラントス夫レ泉源ノ深遠ナル此ノ如クナレハ其ノ末流必ス盛大ナル可キニ今反リテ盛大ヲ闕ク所アルハ之ヲ壅塞スルモノアレハナリ因リテ今諸氏ニ向ヒテ此ノ壅塞ヲ除クニ三学科ヲ以テスルノ方法ヲ矮陳スルモノ此ノ如シ諸氏其喋々ヲ厭ハス深く了得セン事ヲ賞望ス

明治十六年十月十日 愛知県令国貞廉平（註32）

七宝焼に關しては、次の記録「七宝器（農商務省報告）」から分かるように農商務省が調査を実施した。

この中で、いわゆる近代七宝の技法を確立した梶常吉の業績を高く評価するとともに、常吉の出た遠島村をはじめ近隣の名古屋が七宝焼の産地として

大きく発展してきたこと、欧米での七宝焼に対する評価が極めて高いことを述べている。

一 七宝器（農商務省報告）

愛知県尾張国名古屋及遠島（\*とおしま）村ニ於テ製造スル所ノ七宝器ハ内外国人ノ嗜好ニ適シ頗ル著名ノ物産タリ抑々名古屋ノ製造者ハ多少ノ職工ヲ使用セルアリ或ハ自身ニ之ニ従事セルアリ而シテ七宝会社ハ其ノ名最顯ル此ノ社ハ明治四五年ノ創立ニ係リ漸次ニ其ノ業ヲ拡張シ多ク製品ヲ海外ニ輸出シ既ニシテ東京ニ分社ヲ置キタリシカ頻年商況ノ浮沈ニ会スルヲ以テ近來漸ク工事ヲ減縮シ海外輸出品ハ東京分社ニ於テ之ヲ製シ其ノ他ハ名古屋本社ニ於テ之ヲ製シ其ノ区域ヲ分タントス是畢竟遠地ニ在ルトキハ動スレハ時様ニ後レ陳腐ニ属スルノ虞蒐アルヲ以テテリ蓋シ此ノ社ハ名古屋ノ豪商岡谷總助ノ主唱セシ所ニ係リ、其ノ目的ハ益々業務ヲ拡張シテ、国産ノ声誉ヲ全ウセント欲スルニ在リ」遠島村ニ同県海東（\*かいとう）郡ニ在リテ名古屋ヲ距ル事約三里、戸數百三十拾、住民ハ素ト農ヲ以テ業トセシニ一旦七宝ノ業開ケテヨリ皆靡然トシシテ之ニ傾向シ其ノ製造スル所甚々多カリシカ技能ノ巧拙アルヲ以テ悉ク世ノ需用ニ適スル事能ハス故ニ漸次舊業ニ復スルモノ多ク明治十三四年頃ニ及ヒテハ精選ノ職工七八拾人ヲ留メ爾後猶頗ル減少ニ至ルト云フ」抑々七宝焼ノ由来ヲ尋ヌルニ始メ海東郡正治（\*まさはる）村（舊称服部村）ニ梶常吉ト云フ者アリ文政七甲申年（\*一八二四）中此ノ業ヲ企テ種々ノ試験ヲ経テ遂ニ其ノ法ヲ發明シ嘉永六丙丑年（\*一八五三）之ヲ同郡下管津村（\*ママ 下萱津村か？）泰二ト云フ者ニ授ケ安政三癸辰年（\*一八五六）又同郡遠島村林庄五郎ニ伝ヘタリ爾後教ヲ請フ者陸續トシテ踵ヲ接シ遂ニ近來ノ盛大ヲ見ルニ至ル而シテ常吉ハ八拾余ノ高齡ニ及フト雖今ニ工夫ヲ製造ニ凝シ孔々トシテ改良ヲ勉メ其ノ氣力ノ壯ナル壯年ノ者ト雖及ハサル所ナリト云フ（註33）

五 おわりに

薩摩や伊万里・京・瀬戸・九谷・名古屋及び遠島村等については欧米での評価が高く、海外で開催される博覧会に盛んに出品して輸出の振興を図っていた時代にあつて、古くからの伝統をもつ美濃はどのような状況に置かれていたのであろうか。

次の記録「岐阜県工業景況一斑（岐阜県報告）」からは、日用雑器の生産に追われるとともに、不景氣の影響をまともに受けて倒産する窯元やその従業員たちの悲鳴が聞こえてくるようである。

なお、そのような岐阜県の陶磁器産業にあつて、飛騨高山の芳国社（註34）は第二回内国勸業博覧会に入賞するなど、氣を吐いていたことがわかる。

一 岐阜県工業景況一斑（岐阜県報告）

美濃陶業ハ夙ニ日用具ヲ製スルヲ以テ名アリ其ノ製造ノ盛ナルハ往昔ヨリ土岐（\*とき）郡ヲ第一ナリトス創メテ磁器ヲ製セシハ今ヨリ六十六年前ニシテ文政元年（\*一八一八）ノ頃本郡笠原（\*かさはら）村ノ内瀧呂（\*たきろ）ニ起リ漸次多治見（\*たじみ）、妻木（\*つまぎ）、一ノ倉（\*いちのくら）其ノ他ノ諸村ニ及ヘリ藩政ノ頃ハ他領ニ製スル物品ヲ其ノ領内ニ販売スルヲ禁スルノ風アリテ販路ノ区域甚狭カリシカ廢藩後ハ漸ク全国ニ及フニ至レリ」土岐郡内ノ陶窯約百三十拾アリ近年又他ノ各郡ニ數拾窯ヲ新築ス而シテ四十年前ニハ濃州中僅ニ四拾三ナリシト云フ其ノ製品ハ種々ナレトモ最多キモノハ飯碗、茶碗、小皿、盃、爛徳利、ノ五種ニシテ其ノ産額ハ全額ノ四分ノ三ヲ占メ実ニ美濃陶器ノ主品ト称スヘキモノナリ而シテ笠原猿爪（\*ましづめ）ノ飯碗ニ於ケル笠原村ノ内瀧呂妻木ノ小皿ニ於ケル下石（\*おろし）ノ爛徳利ニ於ケル一ノ倉ノ盃ニ於ケル多治見ノ茶碗ニ於ケル各其ノ長スル所ナリ其ノ他ノ各種ヲ製スルハ駄知（\*だち）、高山（\*たかやま）、土岐口（\*ときぐち）、曾木（\*そぎ）、柿野（\*かきの）、大川（\*おおかわ）、水上（\*みずか

み)、馬場山田(\*ばばやまだ)、下手向(\*しもとうげ)、等ノ諸村ナリ」土岐郡ニ於テ陶業ノ隆盛ヲ極メシハ明治十二年ヨリ二年半ノ間ニシテ随ヒテ製スレハ随ヒテ売レ一年ノ代価凡百万円ニ上リ実ニ起業以来ノ盛況ナリキ此ノ時多治見一村ニシテ千有余人ノ職工アリシト云フ是全ク販路ノ殆ト全国ニ及ヘルト外国ニ輸出セシトニ因ルナリ其ノ不景氣ヲ来シ、事前後三度第一ハ明治元年第二ハ明治九年ニテ其ノ時期短ク第三ハ明治十四年七月以来ニシテ今ニ至リ回復ノ兆ナシ殊ニ昨十五年ハ陶器ノ価四割乃至六割ノ下落トナレリは一ハ他ノ物価ノ下落ニ随ヒ一ハ製造人自ラ支フル能ハスシテ物品ヲ投売スルニ因ル而シテ目下製造人十分ノ三ハ殆ト破産ノ態ニテ窯煙亦寥々たり然レトモ斯ク俄ニ衰頹ヲ来ス所以ノモノハ別ニ其ノ故ナキニ非ス聞ク所ニ依レハ昔日トテモ困難ノトキナキニ非スト雖當時ノ工人ハ平生儉約ヲ旨トシ粗衣粗食ニ安スルヲ以テ一旦陶業ノ振ハサルアルモ甚シキ困窮ニ迫ル事ナカリシニ今日ハ一時ノ隆盛ニ遇ヒテ忽奢侈ノ風ヲ生シ會テ他



写真2 染付草花図車輪型手把付珈琲碗皿

銘：濃陶社職工 加藤五輔造  
碗 高 6.8cm 皿 径 12.5cm

日ノ慮ナキニ因ルト  
目今ハ其ノ製品一モ得失相償  
フモノナシ爰ニ多治見村ノ陶  
家西浦清七ノ調査セシ明細表  
ヲ掲ケテ之ヲ示ス  
(※表については略)  
販路ハ第一ヲ東京、大坂、名  
古屋トシ第二ヲ羽前、羽後越  
後、及北国筋トス而シテ東国  
及北海道ヘハ重ニ東京ヨリ九  
州及西国ヘハ専ラ大坂ヨリ輸  
送ス外国向ノ品ハ横浜ニ出ツ

ルモノ多ク神戸長崎ニ出ツルモノハ僅々ナリ  
飛驒陶業ノ濫觴ハ大野郡大名田(\*おおなだ)村江名子(\*えなこ)組  
ノ源十郎焼ト称スル者ニシテ大約百年前ニ在リ當時多ク茶器或ハ青花器  
(ソメツケ)ヲ製セシカ爾後其ノ業ヲ継クモノナク窯煙断絶セシニ今ヨリ  
四十年前舊幕臣豊田東之進ナル者飛驒郡代トナリ高山(\*たかやま)ニ  
在リシトキ始メテ大野郡下岡本(\*しもおかもと)村二七室連列ノ陶窯  
ヲ築キ日用器ヲ製ス其ノ陶工ハ戸田龍蔵小林伊兵衛等ナリシカ其ノ后殆  
ト中絶セリ(小林伊兵衛ハ尾張瀬戸近傍ナル玉野村ノ人ニシテ四十年前  
当地ニ移リ今芳国社ニアリテ陶業ヲ為ス)芳国社ノ社長三輪墨涯ハ元来  
礦業ニ従事セシモノナルカ当地陶窯ノ殆ト中絶セルヲ歎キ同志ト謀リ明



写真3 盛繪芙蓉図花瓶

銘：美濃西浦  
高 10.5cm × 胴径

治十一年陶業ヲ起  
シ下岡本村ニ新窯  
ヲ築キタリ其ノ製  
品ハ高山町ノ自店  
ニテ販売シ漸次拡  
張ノ景況ナリ曩ニ  
第二内国勸業博覧  
会ニ出品シテ有功  
二等賞牌ヲ得、夫  
ヨリ専ラ陶業ニ写  
真3盡力ス目下製  
出ノ品類ハ白磁ノ  
珈琲具、大小ノ皿、其ノ他日用品ニテ自国及越中其ノ他北国筋ヘ販売ス  
ト雖其ノ不景氣ハ美濃陶ニ異ナラス(註35)  
ちなみに、記録「製産調査(京都府報告)」より明治十四年当時の京都府に  
おける工業生産額(表1)を参考資料として紹介したいと考える。この表の



表1 明治十四年京都府製産調査表

品名	製産金額	割合	品名	製産金額	割合
織物	七、五四四、〇二九・一〇〇	五・三	陶磁器	四四二、六七七・四一〇	三・〇
染物	一、一七一、二三四・四五〇	八・〇	瓦及煉化石	八二、六〇一・六三八	〇・六
糸條	四六七、一四八・七二〇	三・二	石細工	三一、九三一・〇五〇	〇・二
裁縫物	一八九、一九二・七二〇	一・三	玻璃器	七、一三四・六四〇	〇・〇
刺縫物	一二七、三〇〇・〇〇〇	〇・九	搾脂及蠟燭	二八八、〇四七・四四〇	二・〇
綿類	二五、四五一・〇八〇	〇・二	香具	一二、二二四・七八〇	〇・一
金屬地金	二二二、〇〇〇・〇〇〇	一・五	繪具染料	二五、三七四・〇〇二	〇・二
金屬箔粉	一三五、四六三・一九〇	〇・九	一閑張及張籠	七、九四三・八二〇	〇・一
金銀器	一五、七八一・八一〇	〇・一	諸画写真	七、七九一・四四〇	〇・一
銅器及銅胎七宝器	三四三、八九六・八〇〇	二・三	屏風襖額軸物	二二、二七五・三八〇	〇・二
真鍮器	一一一、一八二・六九〇	〇・八	紙及其製品并筆墨刷毛	一九三、九三〇・三六二	一・三
鍍金器	三、九〇〇・七〇〇	〇・〇	扇子团扇	一五三、九二〇・二六八	一・一
錫器	四、一七五・七九〇	〇・〇	傘提灯履物	二一八、〇一七・九〇七	一・五
鐵器及利器	一四〇、八八七・八二〇	一・〇	釀造物	一、三六五、七〇七・六五四	九・三
鉄葉細工	一〇、九一四・三六〇	〇・一	澱粉類	五二、九〇三・八八二	〇・四
木材及板類	二四、七六八・二一〇	〇・二	飲食物	四七七、三四三・〇七〇	三・三
戸障子函指物桶類	一四七、一六二・九四〇	一・〇	刻煙草	七二、七〇二・〇一〇	〇・五
漆器	六四、五三八・七七〇	〇・四	化粧具及髮飾具	一〇九、三一一・一三〇	〇・七
竹藤萱梭柶細工	八二、五九六・一八〇	〇・六	神祭器及右職品并樂器	一五、二〇一・一六〇	〇・一
象牙角及鯨鱗細工	四、八九八・五五〇	〇・〇	織機及緒器械度量算盤	四六、八六五・九八〇	〇・三
彫刻品	二二、九九六・一一〇	〇・二	雜貨玩弄品	三二、三五七・七三〇	〇・二
革皮製品	九、九六六・七三〇	〇・一	雜品類	五八、〇七六・二九〇	〇・四
鈹物	三七、三三三・四七五	〇・三	合計	一四、六四一、一三九・二三八	一〇〇・〇

割合については小数点以下第二位を四捨五入したものである。

この品名を見ただけでも、当時の京都が伝統文化を生かした美術工芸の都であり、岐阜県がいかに立ち後れていたかが想像できる。そのような美濃焼産地にあつて、明治十一年（一八七八）の第三回パリ万国博覧会に入賞した加藤五輔（註36）や同二年の第四回パリ万国博覧会に入賞した西浦焼（註37）の存在が極めて特異なものであり、芳国社の活動が光り輝くものであつたか、いま一度掘り下げてみたいものである。

一 製産調査（京都府報告）

左ノ表ハ例年京都府勸業課ノ調査スル所ニ係ル然レドモ此ノ内織物、刺繍、陶磁器、銅器、金属地金ノ五品ハ本年五月京都商工会議所ノ調査スル所ナレハ未其ノ精確ヲ保スヘカラスト雖亦以テ同府下工業ノ一斑ヲ見ルニ足ラン（註38）

註及び引用文献

- 1…『官報 第壹号』（明治十六年七月二日） 9頁
- 2…前掲『官報 第壹号』 8～9頁
- 3…『官報 第三号』（明治十六年七月四日） 12～13頁
- 4…**円中文介** 九谷焼を外国商館に売り込んだ第一人者として、金沢の円中（圓中）孫平・文介（文助）親子があげられる。  
文介は、明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会に自ら渡航して販売店を開設するとともに、明治二四年頃までイギリス・フランス・オランダ・イタリア・アメリカ等にも出かけて九谷焼の直輸出と売り込みを奔走した。
- 5…**起立工商会社**（きりうこうしょうがいしや） 欧米諸国への日本の物産

輸出を願つて、明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会を契機に設立された貿易会社である。

起立工商会社は、日本政府に代わつて日本物産（特に工芸品）の海外輸出を手がける性格をもつていたため、政府の手厚い保護が与えられるとともに、政府の管理下に置かれていた。

もともと採算がとれなかったことに加え、政府による経済的援助の停止によつて、明治二四年に解散した。

- 6…**丹山陸郎**（たんざん・ろくろう） 丹山青海の二男として京都粟田口に生まれた。

明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会には、政府参加派遣使に選拔され、同八年に帰国するまで欧州各地で製陶法の研究を行った。明治一六年のアムステルダム博覧会や同二六年のシカゴ・コロンプス世界博覧会で入賞を果たした。

- 7…**精磁会社**（せいじがいしや） 明治二年（一八七九）、香蘭社から分離して佐賀県有田に設立された、内外向美術的日用食器の制作会社である。

明治一六年のアムステルダム博覧会には入賞を果たしたものの、同二年には経営難のため解散した。

- 8…**七宝会社**（しつぽうがいしや） 愛知県令井関盛良らの勧めで、明治四年（一八七一）、名古屋に設立された七宝の制作・販売会社であつた。多くの工人をかかえていたが、中でも竹内忠兵衛や鈴木清一郎は名工として広く海外にまで知られていた。

明治一三年には東京工場及び京都の販売店を新設したが、その後海外不況の影響を受けて同一八年に事実上操業停止に追い込まれ、東京工場は瀧川惣助（なみかわ・そうすけ）に渡つた。

- 9…『官報 第六拾四号』（明治十六年九月十三日） 12頁

- 10…『官報 第九拾壹号』（明治十六年十月十五日） 9頁
- 11…『官報 第八拾号』（明治十七年二月七日） 11頁
- 12…**香蘭社**（こうらんしゃ） 明治九年（一八七五）に開催された米國フィラデルフィア万国博覧会に出品するため、深川栄左衛門たちによって佐賀県有田に設立された輸出用磁器制作会社である。  
有田の磁器生産の中心的存在として、現在に至っている。
- 13…**錦見山宗兵衛**（きんこうざん・そうべい 七代錦光山宗兵衛） 錦光山家は、近世中期以降、京都粟田口を代表する陶家であった。  
七代宗兵衛は、明治一七年（一八八四）に家督を継ぎ、京薩摩独特の彩画法を用いた裝飾性豊かな作品の制作にあたった。
- 14…**高橋道八**（たかはし・どうはち 四代） 高橋家は京都でも古くから青花（染付）・白磁を制作する家であった。  
四代道八もまた伝統的な青花（染付）・白磁等を得意とし、美術的に優れた作品を海外に輸出して高い評価を得た。
- 15…**幹山伝七**（かんざん・でんひち） 尾張国瀬戸に生まれ、京都に移って磁器專業窯を築いた。  
明治初頭にワグネルによる西洋絵具の実用化に成功し、洋食器を数多く帝室や宮内省に納めた。
- 16…**真葛香山**（まくず・こうざん 初代） 香山は、京都粟田口で古くから陶業を営む真葛家の四男に生まれた。  
当初は茶道具等の制作にあたっていたが、明治四年（一八七一）に輸出用陶磁器の制作のため横浜に窯を開設した。京焼風の色絵磁器や薩摩錦手・青磁等さまざまな技法を駆使した作品は真葛焼と呼ばれ、海外で高い評価を得た。  
明治二九年には、陶芸界二人目の帝室技芸員に選ばれた。
- 17…**清水六兵衛**（きよみず・ろくべえ 四代） 清水家は、寛延年間（一七
- 四八〜一七五一）から現在に至るまで、京都五条坂で操業を続ける陶家である。  
地味な土物の制作を得意とし、国の内外を問わず活躍した。
- 18…**瀬戸磁工社** 明治一四年（一八八一）、瀬戸の名工初代川本柁吉（かわもと・ますきち）と養子の秀雄（川本家の販売面を担当）が中心となり、横浜のストロング商会・東京のハーレンス商会・森村組等の後援を得て、陶磁器の輸出を目的とする商社「磁工社」を東京具足町に設立した。  
また、瀬戸においても「瀬戸磁工社」を設立した。
- 19…**帯山与兵衛**（たいざん・よへえ 九代） 帯山家は、近世中期以来の京都粟田口を代表する陶家であった。  
九代与兵衛は、もともとは三代清水六兵衛の二男として生まれたが、帯山家の養子となった。京薩摩風の色絵金襴手や陶胎七宝の作品を多く制作して海外に輸出し、京都粟田口における輸出の中心的存在であった。
- 20…**瀧川惣助**（なみかわ・そうすけ） 千葉県に生まれ、後に東京日本橋において陶磁器問屋を開業した。  
また、七宝焼の制作に携わり、無線七宝の技術を開発して海外で高い評価を得た。明治二九年には、京都の並川靖之（なみかわ・やすゆき）とともに七宝界最初の帝室技芸員に選ばれた。
- 21…『官報 第七拾九号』（明治十七年二月六日） 12〜13頁
- 22…『官報 第四号』（明治十六年七月五日） 7頁
- 23…前掲『官報 第三号』 7頁
- 24…**ゴットフリート・ワグネル** ドイツのハノーバーに生まれ、化学の学位を修得した。  
明治元年（一八六七）に長崎で石鹼工場を設立するために来日し、同三年には佐賀鍋島藩に招聘されて有田磁器製造所で磁器窯の改良に尽力した。その後、文部卿の依頼により東京職工学校（東京工業大学の前身）

- の設立を委嘱され、教鞭をとった。
- また、七宝の釉薬の改良に成功するとともに、京都府の依頼で陶器・や染織等の工業に関する事業も起こした。
- その半生を日本の美術工芸発展のために尽くした人であった。
- 25…加藤友太郎（かとう・ともたろう） 尾張国瀬戸に生まれ、明治七年に上京した。
- 製陶試験伝習所でワグネルらの指導を受け、明治一五年にはワグネルが築いた欧風窯を譲り受けて友玉園と名づけ、自らは陶寿と号して釉下彩（ゆうかさい）の研究・開発に努めた。
- 26…『官報 第拾三号』（明治十六年七月十六日） 10～11頁
- 27…『官報 第貳百拾貳号』（明治十七年三月十七日） 8～10頁
- 28…『官報 第貳百拾八号』（明治十七年三月二十五日） 9～10頁
- 29…『官報 第貳百貳拾四号』（明治十七年四月一日） 18頁
- 30…加藤勘四郎（かとう・かんしろう） 瀬戸（郷地区）で染付を中心とした磁器の制作にあたった窯元で、菱勘（◇勘）と号した。
- 明治一〇年（一八七七）の第一回内国勸業博覧会では鳳紋賞牌を、同一年の第三回パリ万国博覧会では銅賞を受賞するなど、内外で多くの賞を受賞した。
- 31…『官報 第貳百三拾号』（明治十七年四月九日） 8～9頁
- 32…『官報 第百壹号』（明治十六年十月二十七日） 11～12頁
- 33…『官報 第貳百四拾四号』（明治十七年四月二十五日） 12～13頁
- 34…芳国社（ほうこくしゃ） 明治一一年（一八七八）、事業家三輪源次郎が提唱して生産を開始した。
- 瀬戸や美濃から陶工を招き、有田の新しい技術を導入しての洪草風の磁器は、高い評価を得た。
- 35…『官報 第百四拾七号』（明治十六年十二月二十二日） 15～16頁
- 36…加藤五輔（かとう・ごすけ） 美濃国市之倉において代々窯元を営み、幕末には京都村雲御所に染付を納めていた。
- 染付による細密画を得意とし、輸出用染付を多数制作した。
- 37…西浦焼（にしうらやき） 美濃国多治見の豪商西浦円治（にしうら・えんじ）が始めた美術工芸品で、主として欧米に輸出され、国内にはほとんど残っていない。
- 釉下彩（ゆうかさい）による吹絵（ふきえ）技法の確立が、西浦焼を有名にした。
- 38…『官報 第五拾貳号』（明治十六年八月三十日） 5頁